

「米作りが始まったころー(先生用)」

時代背景

弥生時代は BC800 年～AD300 年が最近の学説だが、当企画では今から 2000 年前頃(AD 1 年前後)の生活を想定して話を展開する。

参考までに AD1 年(紀元1世紀)の頃の世界は

- ・キリスト誕生 紀元1年頃
- ・西アジア ササン朝ペルシャ支配
- ・エジプト クレオパトラが自殺、以後、エジプトはローマの属国になる
- ・中国 漢王朝末期、25 年後漢王朝(後漢より倭国金印授与される)

弥生時代の集落

縄文時代の集落は多くは台地や丘陵の上に営まれていた。

弥生時代は稲作の開始に伴って低地や平野の微高地にも集落がつくられる。

10 軒内外の竪穴住居に倉庫(前期は地面に穴を掘った貯蔵穴、中期以降は高床倉庫)、少し離れた場所に墓地というのが一般的な集落のすがた。

一般的な集落とは別に周囲を壕で囲んだ大規模な集落も登場する。

弥生時代の住居

住居は地面を掘り窪め(竪穴)、地面に柱を建てて地上に建物をつくる掘立柱が主体。

家の周りには水抜き溝を巡らせる。

掘立柱建物は床をつくる高床建物と床はつくりず土間とする平地式建物に分かれる。

平地式竪穴建物は住居に、高床建物は倉庫に使われた。

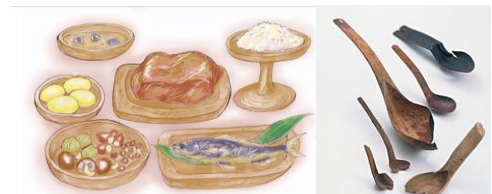
住居や倉庫の他に、祭祀的な性格を備えた大規模な建物も地域の中心的な集落には存在した。(弥生時代には高さのある建物が神聖であるという観念が存在したと推定できる)

弥生時代の食べ物

<主食>

稲の栽培が本格的にはじまり、米をはじめとする穀物が主要な食料となる。米の他に、小麦、アワ、ヒエ、小豆などの雑穀が栽培されていた。

主として米や雑穀を炊いて雑炊のようにしてスプーンで食べていたと想像できる。



当時の食事イメージ

鳥取青谷上寺地遺跡

〈副食〉

・肉類

縄文時代以来の狩猟・漁労によるシカ、イノシシ、アワビ、カキ、マダイ、マグロなどの野生動物や魚介類とカモ、キジなどの野鳥類もたべていた。

このほかに、新たに家畜として犬とイノシシを飼育し、食料としていた。

(犬は縄文時代は食用とすることはなく、人間と同様に墓をつくって埋葬していた。犬を食用にする風習は弥生時代に中国大陸や朝鮮半島から新しく渡来したものと考えられる。ニワトリは食用にした確かな証拠がなく、時を上げる神聖なものとしていたらしい。)

・野菜/果物

縄文時代以来のクリ、クルミ、ドングリなどに、カキ、モモなど、ウリ類を食べていた。

この他、山菜やキノコ類、セリやツクシなどの食用野草も当然食料になった。

〈調味料〉

塩を作った製塩土器が瀬戸内海地方の遺跡などから出土しており、塩が存在したことが確認されている。また干貝や干した海草などが、塩味と出汁を出す調味料として使われていた。

(塩をもちいて、漬物のような保存食が存在した可能性も考えられる。)

〈嗜好品〉

魏志倭人伝の記述から酒があったことが知られている。当時の酒は米などの穀物を噛んでそれを甕などに入れて発酵させたものであったと考えられる。

弥生時代の身なり

〈庶民〉

魏志倭人伝には、布の真中に穴をあけてここに頭を通して着る貫頭衣を着ていたと述べられている。

(ただし、遺跡から出土している織機から弥生時代の織布の幅は 30 センチ前後しかなく、一幅で身幅を覆うことが出来る布幅を持ちその中央に穴をあけて頭を通して着用するという貫頭衣は作れなかったと考えられ、2 枚の布を頭と腕の出る部分を残して脇で綴り合せた貫頭衣もどき服ではなかったかと想像できる)



〈身分の高い人〉

・衣服

吉野ヶ里遺跡から出土した絹織物から貫頭衣とは構造が異なる袖付きの衣服を弥生時代の富裕層が着用していたことが明らかとなった。さらに上位身分の人々の正装は袖付で赤や紫に染められた鮮やかな絹であったようだ。

・履物

板を浅くえぐった木製の履物と考えられる遺物が出土しており、沓が存在していたことも明らかになっている。



木製の履物

・装飾品

身を飾る装身具には、腕輪や各種の玉類、指輪、耳飾などがある。沖縄や奄美地方産の貝殻製の腕輪や、新潟県糸魚川流域産のヒスイ製の勾玉もことから、他の地方との広域的な交流が行われていた。

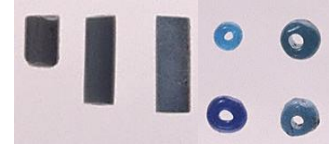
本来は身を守る魔よけのようなものであったが、次第に権力や財力を誇るものになってきた。



腕輪



勾玉



管玉

ガラス玉

弥生時代の土器

稲作にともなってもたらされた弥生土器は機能に応じて簡素に作られるのを特徴である。

貯蔵用の壺、煮沸用の甕、食べ物を盛るための高坏や鉢がある。



壺

甕

高坏

鉢